

学校点描

部活動を延長すると日が暮れるため今週から5時間授業にして部活の時間を確保しています。生徒の体調管理の面からも考えています。

《S中学校》

NO.8 H30. 8.30

担当：教頭

天候が目まぐるしく変化する中での新庄祭りが終わりました。27日は朝6時から駅前の広場に集まって、市内のゴミ拾いボランティアをしました。あじさいネットワークの方々と警察署員の方々も一緒に活動です。活動を終えて7時40分に広場に戻ってくる生徒たちの手には、空き缶やお酒を飲んだプラスチックのカップ、タバコ、傘、電球・・・が袋一杯でした。活動が終わって、生活安全課長にお礼を言いに行くと、「中学生は狭いところ、汚れているところまで入って行って拾っていましたよ。感心しました。この生徒たちが大人になればごみの数が減ると思います。」と感想を話してくれました。

28日は鮭川中学校を会場に地区の少年弁論大会が開催されました。学校を代表した中学生が、日ごろ思い思いに考えていることを主張する大会です。本校では3年生のT・Nさんが出場しました。夏季休業中もW教諭とともに、作り上げてきた弁論文です。出発前に、校長とわたしのところに挨拶にきてくれました。「あなたの考えは素晴らしいから自信を持って発表してきてください」と校長から激励を受けて出発しました。弁論文の内容は、祖父が病になった中、家族で支え合って生きている今を通して、気がついたことを主張しています。

自分の役割を気づかせる教育

2年生の廊下には、家庭科の夏休みの宿題が貼られています。地域の食材を生かした料理を作ってきたレポートのようです。山形名物の芋煮やだしをつくってきた生徒の他にも、なかなか凝った料理があります。A・Tさんは、“焼き鳥 にらソース”でした。にらソースとは考えたなあ后感心します。K・Rさんは、“ご飯、芋煮、だし、ほうれん草とトマトのサラダ”もうこれで豪華な一食分です。家の畑で取れた野菜、泉田の芋など食材がきちんと地場産になっていました。きっと家の人と話をしながら、自分らしい料理を考えてきたのでしょう。

また、さらに廊下を歩いていくと、新聞記事を切って貼り、その隣に記事の内容と自分の考えを書いた掲示物もあります。

S・Aさんは、『日大のチア監督パワハラか』の記事から書いたようです。「・・・部員と監督の考えがずれてしまったことで、今回のようなパワハラ問題が起きてしまったと思います。私は、よりよい部活をするうえで、部全体で意見を言い合うことが大切だと思います。みなさんはパワハラ問題についてどう思いますか。」と最後は読んでいる人に問題提起をしていました。

Y・Hさんは『取り戻せず申し訳ない（4人の拉致から40年）』の記事から、「この記事を読み私が考えたことは、私たちのように毎日何事も起きず平凡に過ごしていた人が急に男たちに襲われ、何も知らない国に連れていかれそこで命を落としてしまうことは、本当にあってはならない事だと思います。どうしてそんな出来事を日本は早く解決しないのでしょうか・・・。」と書きました。この活動を通して自分の考えを自信を持ってしっかり主張できる力を育てています。

27日の朝ボランティアの集合場所に向かっていると、S祭りで優勝した山車が、駅構内に入ろうとしています。駅の正面入り口の大きな扉を開口し、幅ぎりぎりに山車が入っていきます。その地区の若者や大人たちが気を使いながらの搬入作業で、通りすがりの人も足を止めて見入ってしまいます。その若者の中に、なにか見慣れた顔がいるなあと思ったら、昔の教え子のKさん

でした。有名な農機具メーカーの帽子を被ったKさんは、真剣な表情で力を込めて山車を押しています。顔つきは精悍でも、中学生の頃の面影はしっかりあります。

10年程前、「家、農家だけど、本当に農業継ぎたいのが、わがんね。」と答えた中3のKさん。



いつもは意見をしっかり言う彼でしたが、将来のことになるとトーンダウンです。何回目かの進路面談の後、「先生、俺農業継ぐことにしたんだ。やっぱり、これ俺さあってる。」とKさんが言いました。

「そうか、そうやって働く姿、Kらしいもんね」とわたし。

「俺らしい？俺らしい？」嬉しそうに繰り返し聞き返すKさんを思い出します。

今の中高生は「日本はよい社会ではない、将来は明るくない、大人になりたくない、競争せずマイペースでいきたい、けれど今は幸せ」といった意識傾向があり、自分の将来や大人になった姿が見えてこない子どもが多いようです。（参照：日本放送出版協会『NHK中学生・高校生の生活と意識調査』）特に、中学時代は、「自分らしさとは何か」で悩みもがく時期です。心理学的には、この時期を『自己同一性との戦いの時期』とい

われます。この戦いを乗り越えるにはやはり教育が重要です。「自分はどんな人間か？何のために生きているのか」見えなくなっている子どもたちに、自分探し、自己確認をさせ、「人は誰でも目的を持って生まれてきている」、「誰もが幸せになれる力を持っている」ことを伝える教育です。子どもに自分の役割を気づかせる教育といってもいいでしょう。だとしたら、Kさんは、自分の家族としての役割、社会の中での役割を何かのきっかけで気づくことができたのでしょうか。

弁論大会に出場したT・Nさんの弁論の原稿の一部です。

「じいちゃんは今、たくさんの人に支えられて生活をしている。家族の前では無口なじいちゃんだが、デイサービスに行って来た日は少し様子が違う。言葉数は多くないが、家でも話をしてくれるのだ。それが、僕たち家族にはとてもうれしいことだ。そしてそんなじいちゃんの姿は、僕にとっても大切なことを教えてくれた。それは、「人間は人と繋がることで生きている」ということ。・・・ほんの少しの勇気が温かい社会を作っていく原動力になるのだとぼくは信じている。」

「自分の役割を気づかせる教育は何だ？」と問われれば、家族のエピソードから学ぶ教育に勝るものはないと答えることにします。

※T・Nさんの弁論は地区大会で優秀賞となり、最北ブロック大会に出場することになりました。

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。

Shinyatk1616n@yahoo.co.jp